渡辺一雄

浮沈社員

徳間文庫

徳間文庫

浮沈社員

© Kazuo Watanabe 1991

わ-1-22

1991年6月15日 初刷

著者 渡辺一雄

発行者 荒井修

東京都港区新橋四—一〇 〒一〇五

発行所 株式会社徳間書店

電話(〇三)三四三三・六二三一(大代)

振替 東京四—四四三九二番

印刷 凸版印刷株式会社

製本

〈編集担当 本間 肇〉

ISBN4-19-599340-7

(乱丁、落丁本はお取りかえいたします)

江苏工业学院图书馆
藏书章

渡辺一雄

德間書店

目次

予期せぬ椿事（ちんじ） 5
功利結婚 30
奇貨おくべし 58
居酒屋「大老」 81
まき餌 106
暴力刑事 132
セックススキャンダル 159
白井の野望 183
仕掛け完了 206
沈む男、浮かぶ男 227
あとがき 251

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

予期せぬ椿事

事件は十分足らずの間におこった。

「さっきからしきりに呼んでいるS市の杵島典夫さんてあなたのことじゃないの？」

加治卓郎の夫人、フサが、買物の伴をしている冨士デパート京都支店の外商課員、杵島典夫に質した。

どこのデパートでも買物客を不快にさせてはいけないという配慮から、店内放送で社員を呼び出すことは原則的に禁じていた。

しかし、やむを得ず店内放送で社員を呼び出さねばならない時もあった。

その場合でも、買物客に社員を呼び出しているなと思わせないよう各店各様さまざまな工夫をこらしていた。

冨士デパートでは、何課の誰それ、といわず買物客を呼び出す風を装って、どこそこの何々さま、という風に店内放送した。

「S市の杵島典夫さま、最寄りのお電話におかかりくださいませ」
と何度も店内放送が流れていることは杵島も気がついていた。
最寄りの電話にかかれとは、杵島の場合、用があるから至急外商課事務室へ電話せよ、ということだった。
加治夫人のお伴をして店内を廻っていることは課長も承知している筈だのにどうしてだろう、訝りながら杵島は店内放送を聞き流してフサの伴をつづけた。
たとえ何度店内放送で呼び出されてもフサの傍を離れられない事情が杵島にはあったからである。
加治卓郎。京都の隣県S県選出の保守党国会議員。
フサはその夫人だった。
五十歳を半ばはこしているということだったが小柄なせいか十歳は若くみえた。
上品で慎ましやかで、国会議員夫人というのに些かもえらぶるところがなかった。
庶民的ないい奥さまと評判はいたってよく加治卓郎の票の半分は夫人の人気票とさえ地元ではいわれていた。
よく気がつき、世話好きで、担当の杵島が独身ときいて、
「あなたのお嫁さんは私が絶対お世話するわ。どんなタイプの方がいいの？」

と買物にくるたび、いつもいっていた。

「S市の杵島さまってあなたのことじゃないの？」

と質されて杵島は「はい」とは答えたが、「大したことではありませんから」とフサの傍は離れなかった。

フサには人にいえない奇癖というか奇病というか、妙な癖があった。

万引き癖だった。

フサはS県でも屈指の旧家の一人娘で、卓郎はフサの婿養子だった。卓郎のはじめの頃の選挙資金はフサの家から出ているといわれたくらいの大金持ちでもあった。

フサに万引き癖の出たのは中年をすぎてからだった。

近所の洋品店へいって陳列のアクセサリーをそっとバッグの中へいれ素知らぬ顔をしてフサは出ていった。

いたずらかと思ったが、いたずらをする年齢でも社会的な地位でもなかった。その店は加治家に何かと世話になっていたが、もしほかの店でおなじことをしたらと思って親切心からその店の主は、

「話し辛いことですが」

とその頃はまだ健在だったフサの母にそのことを耳うちした。

母親は仰天した。フサにその事実を確認しようかと思ったが軽率にそんなことをすればフサの心を傷つける。

いろいろ思い悩んだ揚げ句、懇意にしている神経科医に事情をうちあけ相談したが、家人が注意する以外手段はないだろうといわれた。

困ったことにフサは大の買物好きで京都の冨士デパートへは週に一度の割りで足を運んだ。

近所の店へは家人がついていったが、京都へまではついていけなかった。

そこで支店長に事情をあかし、フサが買物にいった場合は必ず担当者がついて不測の事態がおこらないようにと頼んだ。

ほかの客だったら勿論(もちろん)そんな面倒なことはひきうけなかった。が、加治卓郎といえばＶＩＰだった。無下に断わることも出来ず支店長は、

「かしこまりました」

とひきうけたが、不意にこられたのでは担当者が不在ということもあるので前以(まえもっ)て予定をきかして欲しいとは条件をつけた。

家人はその条件を励行し、

「あす奥さまがそちらへ参られます」

と必ず連絡した。

フサが買物にくる日は担当者は休暇をとることも出来なかった。
それどころか病気で休んでいてもそれをおして出勤しなければならなかった。
その代り売り上げノルマは半減してもらえた。
杵島がフサの担当になったのは前任者が定年で退職したからだった。
外商課長からフサを担当するについての〝特命事項〟の内容をあかされた時、杵島はとんでもない貧乏籤をひいてしまったものだと思った。
が、その夜わざわざ前任者が杵島の家まできて、
「大変だろうけれども、奥さまも考えてみればお気の毒な方だ、どうか奥さまのために一生懸命務めてくれ」
頭をさげたので杵島は、フサをまだその時は知らなかったが、よほどいい人なのだろうと思い認識をすこしばかり変えた。
フサは杵島の直感通り本当にいい女性だった。
いつか杵島は仕事を離れて誠心誠意、フサに尽すようになった。
しかし、フサの買物の伴は、想像以上に神経が疲れた。
無意識でするそうだが、どこかに万引きのスリルを楽しんでいるところがフサにはあった。
杵島が傍にいて目を見張らしていると万引きをしないのに、何かの都合でチョッとでも目を

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

離すと、その瞬間をとらえてフサはサッと商品をバッグにしまった。
その瞬間をもし誰かに見咎(みとが)められたら万引き現行犯といわれても抗弁のしようがなかった。
フサを万引きの現行犯にしないため杵島は掛売り上げ帳を持ち歩き、その場でフサがバッグにしまった商品を掛売り上げとして記帳した。
神経の疲れる仕事だったが、杵島とフサの間にデパートの掛売り顧客と担当の外商課員とは別の感情が芽生えてきた。
いたずら盛りの幼児が母親の手を振りきってこわいもの知らずに街路に飛び出す。交通事故からわが子を守るため母親がそのあとを必死に追う。たとえ方はおかしいが、杵島のフサに対する感情はそれに近かった。
そのことがフサにも無意識のうちに感じられるのか、買物以外のことでも何かにつけて「杵島さん」「杵島さん」と相談を持ちかけた。
店内放送が、
「S市の杵島典夫さま――」
とおなじ文句をくり返していた。
「また呼んでいるわ。早くいってらっしゃい」
フサは促した。

そこまでいわれては拒むことも出来なかった。まさか奥さまを一人にすると何をされるかわかりませんから、ともいえなかった。

それにフサ一人にすれば必ず万引きするとも限らなかった。

「それではすぐ戻ってまいりますから」

杵島は電話のあるサークルへ駆けた。

その背にフサは、

「そんなに急ぐことはないわよ、私一人でゆっくりお買物しているから」

と声をかけた。

杵島を呼び出したのは外商課事務係の女子社員だった。

杵島が売場の電話機から外商課へ電話すると彼女が出てきて早口でまくし立てた。

「さっきから何度も店内放送しているのに聞こえなかったの」

「それより何の用だ？」

「さっき部長がみえてあんたに先月の売り上げのことできたいことがあるとおっしゃっていたわ。すぐ部長室へいった方がいいのじゃない」

彼女は杵島より年上だった。

彼女は杵島の〝特命事項〟を知らない。

彼女とすれば、姉さん女房的好意から部長がきたことを早く知らせてやらねばと思ってしたのだが、杵島にすれば、まさにいらざるお節介だった。

「それくらいのことで店内放送などするな」

受話器を音を立ててておいた。

人が親切にいってあげているのに何よそのいい方は、切れた電話に事務係は文句をいった。

杵島は急いで元の売場へ戻った。

そこにフサの姿はなかった。

不吉な予感がした。

不幸にも予感は的中した。

女子社員が二、三人集って何やらヒソヒソ話しあっていた。

その中に顔見知りの女子社員がいたので杵島は、

「僕と一緒にいた奥さん、どこへいかれたか知らないか？」

ときいた。

「大変なことがあったのよ」

彼女たちはちょうどそのことを話しあっていたようだった。

「何があったのだ？」

杵島は胸騒ぎを覚えた。

口々に彼女たちは今しがたこの売場でおこったことを杵島に話した。

デパートへは所轄署の刑事が万引きや置き引きに備えて張りこんでいるが、上品な奥さんが顔に似合わず大胆にも刑事の前で万引きし、刑事に現行犯逮捕され、保安課へ連行された、ということだった。

その婦人がフサであることは明らかだった。女子社員は、刑事の前で大胆にも、といったが、フサにはそもそも罪の意識はないのだから、大胆も不敵もなかった。が、そんなことはどうでもよかった。それより今は一刻も早くと杵島は文字通り脱兎の如く保安課へ急行した。

保安課の事務室にフサはいた。

どうして自分がここに連れてこられたのかわからないらしくフサの様子はまるで借りてきた猫のようだった。

フサの前にデパートの人間ではない男が坐っていた。

その男がフサを連行してきた所轄署の刑事だなと杵島にはすぐ察しがついた。

二人の間の机のうえに、商品が何点か並べてあった。

杵島はすばやくその商品に値札がついているかどうかみた。

客が買いあげた商品なら販売員が値札をとってから包装して渡す。が、机のうえに並べてあ

る商品にはすべて値札がついていた。しかし何という早業だろうとその点数の多さに杵島は妙な感心をした。

「奥さん」

杵島はフサに呼びかけた。

「君は誰だ？」

刑事に誰何（すいか）された杵島はこの場でうかつなことはいえないぞと思い、保安課の係長を、

「ちょっと」

と別室へ呼んだ。

「何だ？」

とついてきた保安係長は、

「あの万引き女と君は知り合いか？」

ときいた。

値札のついている商品がバッグから出てきたので保安係長もフサを万引きときめつけた。そしてそれは当然なことだった。

「私のお客さまなのです」

保安係長は杵島が外商課員ということを知っていた。

「外商のお客さまがどうして万引きなどされるのだ？」
デパートの外商顧客は富裕階級ということになっていたから、保安係長は、金持ちが万引きしたことが解せなかったのである。
保安係長にも極秘の〝特命事項〟はあかすことが出来なかった。
「あのお客さまは超A級のお客さまですので私がついて廻ってお買物は一括してあとで掛け売り上げに帳合いすることになっているのです」
われながら苦しい弁明だと思ったが、そんないい方しか出来なかった。
「ですから、係長さんの口から刑事さんにあの方は決して万引きではないとおっしゃってください」
杵島は頭を深々とさげ、頼んだ。
保安課の人間は外商の仕組みなど知らない。値札がついていてもそれでは必ずしも万引きではないのだなと諒解(りょうかい)し、刑事に杵島の弁明をそのまま耳うちしてくれた。
刑事はどうも合点がいきかねるとばかり首をひねっていたが、デパートの人間が万引きではないといっている人間を万引き犯として逮捕する訳にもいかなかった。
「それならちゃんとついていないと駄目じゃないか」
と文句はいったが、フサはその場で釈放してくれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com